慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	朝鮮と福沢諭吉：最終講義(石塚巌教授退任記念号)
Sub Title	Korea and Yukichi Fukuzawa(In Honourbof Professor Iwao Ishizaka)
Author	石坂, 巌(Ishizaka, Iwao)
Publisher	
Publication year	1986
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.29, No.2 (1986. 6) ,p.1- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19860625-04053943

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
29 巻 2 号
1986 年 6 月

朝鮮と福沢諭吉

——最終講義——

石坂　巌

はじめに

今，学部長からご紹介いただきましたが，私の専門と今日は違うことを，こういう機会にしゃべりますので，最初どうしてこういうテーマを選んだかということを，お話させていただきたいと思います。

それで，何故そういうテーマを選んだか。私はもともと福沢の専門家ではありません。むしろほとんど読んでいなかった。それが読むきっかけになりましたのは，やはり商学部の例の事件がありまして，私自身の反省を含めて，慶応義塾とはどういうことで創られたのか，ということから，福沢を読み始めたわけです。そこで初めて目から鱗が落ちたという思いをしたことがありまして，それ以来，福沢を読んできたわけです。

それから次に，私と朝鮮という問題ですが，私は帝国主義時代の日本に生まれ育っておりますので，どうしても差別観がずうっとあったのです。だから今でも，朝鮮とか朝鮮人というと，何となく私の気持ちに引っかかるところがあって，アメリカ人，ドイツ人，フランス人というようには，ちょっと言いにくい側面があるのです。他方，戦争というものの受けとめ方なのですが，私の田舎の友だちのうち，私は郷里の（高崎）商業学校を出たんですけど，戦争が終った時に生きていたのは，半分ぐらいしかいないのです。そうすると戦争は被害者意識でしかうけとめられなかったのです。そういう被害者意識で戦争を受けとめておりましたから，私たちの国が，朝鮮，中国，その他の地域で加害者であったということまで，思い至るにはなかなか及ばなかったのです。その加害者だということをはっきり自覚させてくれたのは，大学紛争の時の学生諸君であったのですが，そこで加害者意識を私は改めて確認したのです。そうこうしているうちに先ほど言いましたように福沢諭吉とぶつかり，福沢の書いたものを読み進んでおりますうちに，朝鮮の問題は避けて通れない，ということに気が付いてきたわけです。

それで，福沢諭吉を読んでおりますと，いわゆる例の『脱亜論』という問題が，福沢諭吉のアキレス腱であるといわれ，いろいろと批判をされているのを知ったのです。例えば，もう一昨昨年になりますか，教科書問題がありましたが，その教科書問題に関連して韓国で批判された。そうした批判のなかで韓国に対する支配とか差別は，福沢諭吉以来というように，書かれているのです。ともかく戦争に負けて以来，私は詳しく調べておりませんけれども，目に入った範囲内では，もう昭和二十数年頃から，福沢諭吉の「脱亜論」ということで，福沢は日本帝国主義の理論的な露払いをしたと批判されてきています。いわゆる進歩派，左翼の人たち，そういう人たちからずうっと批判されて来ているのです。さらに朝鮮問題の研究者たちの多くも（ここで朝鮮と言っているのは，今日の韓国，朝鮮民主主義人民共和国を含めているわけですけれども），やはりそういう目で見ております。

ところが私が，福沢諭吉をそういう点で，ずうっと読んでおりますと，どうも違うのではないかということに気がついてきたのです。そこで私が読んだところと，世間普通の福沢諭吉批判の『脱亜論』というのとちょっと違うというところを，出来るだけ早く世間に発表したいと思っておりますうちに，生誕150年の福沢展を福沢研究センターが担当することになりまして，まとめる暇が無くなってしまい，今日に至ってしまったのです。そういう点で，私が福沢センターの責任者でいるうちに，少なくとも私の義務として，私の読んだところを発表したい。それは私自身の，先ほど言ったような意味の，生涯過程での私の脱皮を含めて，そしてまた私的には，長い間，世話になった，慶応義塾に対する私の感謝の印として，またちょっと大きく言わしていただければ，学問研究者としての歴史の真実を明らかにしたいと，そういうことでこういうテーマを今日は選ばしていただくことになったわけです。

I

福沢と朝鮮を考える場合に，私は，三つの立場からアプローチしなくてはいけないと思っています。それは，やはり日本側からの研究ばかりでは不十分である。それから朝鮮側からの研究だけでも不十分で，さらに，中国側，当時の清国ですね。清国側からのアプローチも必要で，この三つの視点からアプローチしないと，当時の東アジアにおける歴史のダイナミズムというものは，到底つかめないと思うのです。しかし中国語は出来ませんし，それからハングル語も少し勉強したんですけど，もうもうろくしちゃって，前の晩に覚えたのを，翌朝になってきれいに忘れるというありさまで，なかなか出来ないので，朝鮮の研究者の日本で発表された方のものとか，翻訳されたものを通じて，少し朝鮮の研究者，それから中国の研究者の方の研究を摂取させていただいて，私なりにまとめてみたわけなんですけれども，そういうことで私の今日話すことには，明らかに限度がありますし，それから時間的な制約で，そういう広い視点でのお話は今日は出来ないということを，ま

ず最初にお含みおき願いたいのです。

そうしたことで先ず朝鮮に関した本を読んでおりますうちに，だんだん朝鮮の社会というのが，たいへん興味深く思われるようになりました。朝鮮の社会，とくに日本が朝鮮を植民地にするまでの間の李氏朝鮮社会というのは，＜文＞と＜原理＞による社会だということが，はっきりわかったのです。在日朝鮮人の研究者の書かれたものを読みますと，みんな文章がうまくて，非常に明快なんですね。朝鮮の研究者の日本文というのは，非常にわかり易くて，論理整然としている。これはやはり伝統的な＜文＞を中心とした社会の，生んだものじゃないかと思います。それに対して日本の方は武力の＜武＞と，それから＜現世第一＞ですね。つまり現実即応第一で，プリンシプルなんか二の次で，現実の生活がよければよいという，そういう国だという，この二つの国の対照的な特徴がよくわかったのです。

ところで，一方の文と原理を中心とした社会で，その＜文と原理＞が，権威主義的な形式に流れてしまって，既成の権力体制維持に，流れてしまった，そういう面があったと思うのです。それから他方の日本の方では，＜武＞に近代国家という新しい衣を着せて，そして現世欲求（資本主義）を真正面から押し進めるようになった。そうした両者がからみ合ったらどうなるか。一方の文と，それから原理を中心とする社会において，それが権威主義に流れて，既成の権力体制維持にしがみつくような方法をとる。一方は，武に新しい衣を着せて，現世欲求第一主義を前面に出して来る。この両者のからみ合いが，私は明治初期から，大正，昭和に至る近代日鮮関係のあり方だったと思うのです。

そして，＜文と原理＞の国で，それが既成の権力体制の維持の方に流れていた状況から脱皮して，＜文と原理＞を再生させようとするところに，新しい国づくりを志した人物が出てきた。それはそれなりに，やはりその国にとっての志士だったと言っていいと思うのです。他方の国において，その＜武と忠＞を，＜文と人権＞に替えて，それによって現世主義に新しい筋道を与えるところに，また新しい国づくりを志した人物が出現した。そうすると両方のそういう人物同志が，知りあい，ふれあったらどういうことになるか。言うまでもなくそこに同志的な結合としての一体観が生まれるのは，まちがいないと思うのです。この同志たちが，先ほど申し上げましたような，からみ合いの中で演じた壮大な歴史的なドラマが，しかも悲劇的な色彩を帯びた舞台の進行が，これが福沢と朝鮮であった，と私には思われます。

つぎに朝鮮と福沢という関係で福沢を見る場合の視点について，私なりにいくつかのメモを考えてみますと，福沢のような主義主張が非常に明確な人物について，その時々の発言や態度を，そのものとして捉えて，今，言いましたような主義や思想と関係なく，そういう意味で断片化したものを，福沢の理論や態度とするということが，果してできるのだろうか。あれだけの思想的な原理というものをもった人の，その思想的な原理との関係なしに，その時々の問題についての発言を，そ

のものとして処理して，これが福沢の思想だとか，理論だということが出来るのだろうか。

それから第二番目に，一般に先ほど言いましたように批判とされるところの「脱亜論」，あるいは「脱亜入欧論」というのが，その後の明治，大正の日本帝国主義進出の理論的な先触れだと言われますけれども，その『脱亜論』を書いた以後の福沢の言動が，果たしてそういうように「脱亜入欧」したのかどうか，その点の論証なり検証なくして，今，言ったような帝国主義の理論的な先触れだということが出来るのかどうか。ほとんどすべての福沢に対する批判を見る限り，その点の検証はゼロだと言っていいと思うのです。もし福沢が脱亜論者であるというならば，福沢は初めっから，私は脱亜論者だったと言っていいと思うのです。

中国では清末に，「中体西用」ということがいわれた。つまり法や政治は伝統的中国社会の原理がもとで，西洋でつくり出された科学技術は利用するということです。同じようなことが朝鮮では，「東道西器」と言われ，日本では，「東洋道徳，西洋芸術」と言われた。西洋芸術というのは西洋技術のことですね。そういうことから言えば，福沢諭吉は明らかに，西洋の生み出した近代人権の理念と，西洋科学を専ら自己の主張の拠りどころとしている。したがって明らかに中国（清国），朝鮮あるいは日本のなかであの幕末から明治の初めにかけて，福沢諭吉のみが，明確にそういう点では，脱亜をしていたということが言えるわけです。

さらに，脱亜論ということで福沢を批判する場合に，脱亜の亜自身また問題ですが，それを別としても，一般に当時の清国と朝鮮を一緒にして，ほとんど多くの人が批判している。しかし福沢は明らかに，清国と朝鮮とは区別して，ちがった態度を取っていた。清国は彼にとって非常に強力な大国であります。そしてまた保守的な大国であり，さらに福沢諭吉が目の敵にした儒教の，本家本元です。福沢はよく「腐儒」と言っていますけれど，清国はその腐儒の国だとされています。

ところが朝鮮はそれに対して，福沢諭吉にとっては，＜愛情＞の対象であったといえます。福沢諭吉の門弟で，明治・大正の偉大なジャーナリストで，後に貴族院議員になった竹越与三郎がいますけれども，竹越与三郎は「朝鮮は福沢諭吉の最初の政治的な恋愛であって，最後の政治的な恋愛であった」といい，「福沢諭吉は朝鮮に恋したのだ」と言ってるのです。この政治的恋愛はいつ頃からかといえば，私は四十八・九歳の頃。つまり彼が四十八歳の時に朝鮮から若い青年が，福沢の家に預けられて，勉強をするようになった時からだ，と考えます。四十八や四十九歳というのは，今は若々しい壮年の年代ですけれども，私はある時，福沢諭吉が，自分のことを「福沢翁」と書いてるのを読んだことがあり，調べてみたら四十九歳の時なんですね。昔は人生五十年と言いました。そういう点から言いますと，もう四十九歳というのは，当時だとまさに，自分自身で「翁」と呼んでも，不思議ではなかった。こう考えますと，老いらくの恋というのは，もう皆さんご存じのように……ご存じないかもしれませんけれど（笑），始末の悪いものですね。それからこれは丸山真男氏が，かつて鋭く指摘されましたが，一つのことに惑い溺れる，惑溺を排すというのが福沢先生

の哲学の一つだということです。ところがそういう福沢がただ一つ惑溺したのは，私は朝鮮に関してだったと思います。つまり朝鮮に対しての政治的恋愛とは，惑溺したことだと言っていいと思うのです。

私が福沢と朝鮮ということを考える場合に，いくつかの自分なりのメモをしたのはそういうことです。そうしますと結局，福沢と朝鮮の関係の，全体的なコンセプトなしに，脱亜論なりその他のことで，福沢諭吉の思想を云々することは出来ないということです。今日はその時間ございませんので，福沢と朝鮮の全体的なコンセプトの，大まかな枠組み程度のことを，皆さんにお話しさせていただきたいと思います。

II

福沢諭吉は初期の頃は，中国や朝鮮のことについては無関心であったと言えます。これは日本を含めまして中国，朝鮮の東アジアの国はまだまだ文明化が遅れてる未開の国である。学問，商売，それから国の貧富，軍備，何れも西洋に及ばない。関税自主権もない。そういう意味で西洋の帝国主義に対する独立が，たいへん心配だということが，専ら福沢の初期の関心だったのです。そういう点で，福沢諭吉は『学問のすゝめ』とか『文明論之概略』を書いてそれが非常に評判を博して，脂の乗りきったそういう時代に，朝鮮，あるいは中国ということに関して書いたのは，三つの論文しかないんです。明治七年，明治八年，明治十年に書いた，三つの論文しかないんです。それを見ますと，当時，盛んに言われた「征韓論」とか，それから台湾に流れ着いた日本人が殺されたというので，台湾に出兵するということがありましたが，その点については，われわれの問題はアジアにはなく，対西洋であり，台湾に出兵したけれども，結局，儲けたのは，火事泥的に清国と日本に，武器その他を売りつけたヨーロッパじゃないか。だから今後わがアジアでは，アジアの事変で彼らに利益を与えることのないようにしたいものだと，言っているのです。

それから，「征韓論争」のことについては，彼は朝鮮は小野蛮国で貿易したって利益はないし，学問も兵力もまだ近代化されていないのだから向うから属国になりたいといってきてもかえって困る。こう言っているのです。だから福沢は明らかに無関心であり，また，蔑視していたのです。

当時征韓論の関係で，一般に朝鮮蔑視説が非常に強かったのですが福沢もやはり同じ方向ではあったのですけれど，ただ世間の蔑視説とちょっと違うところは，ヨーロッパとの関係で朝鮮が停滞してるといって，いい気になって笑ってはいられないぞと，われわれもまた，いつやられてしまうかもわからないという面で，単に蔑視だけしていい気になっているのとはちがってはいたが，ともかく無関心か，蔑視の立場でしかなかったのです。

ところが明治15年，時事新報が発行されるようになったのですが，この時事新報に明治15年に朝

鮮に関して書いた論説は三十一篇，現われています。そしてそれらを含めて明治十五年から明治十八年ぐらいまでの間に，七・八十篇の朝鮮に関する論文を社説で書いております。それから少し間をおいて明治二十五・六年から三十年頃までの間に，また七・八十篇朝鮮に対する論説を書いているのです。ですから明治十五年頃から，福沢諭吉の朝鮮に対する態度，関心が一変したのです。

ところで明治九年に，朝鮮と日本との間に国交を結ぶ条約が出来ますと，その翌年の明治十年に，京都の東本願寺が釜山に寺を開いている。その東本願寺に十一年の終り頃，ある一人の朝鮮人の僧侶が訪ねて来た。当時の朝鮮では，僧侶というのは，一番，軽蔑された人間というか，社会層だったのです。李氏朝鮮では儒教が徹底的に仏教を叩きまして，儒教の国になっていますから，僧侶というのはとくに差別された存在で，もうどうしようもない奴が僧侶になるんだと言われていた。社会階層としては最上位に国王がいて，つぎに両班（ヤンバン）という貴族層がいる，その下に役人だとか，あるいは通訳だとか，お医者さんだとかいう技術・技能の所有者たちの中人という層があって，その下には常民という一般の人たちがいて，最下層に奴隷層がいた。この差別された奴隷層と同じなのが，僧侶ということになっていたのです。だから東本願寺も朝鮮の人に対する布教で行くというよりも，朝鮮に進出した日本人を対象にしていたのですね。したがって十一年の終り頃釜山の東本願寺に朝鮮人の僧が訪ねてきたというのはちょっとした出来事だったのです。その人（李東仁）が翌年，京都東本願寺から派遣された日本人僧が帰る時に，一緒に，耳が不自由で口が不自由な日本人僧侶という形で，つまり当時は日本と国交を開かれたけれども，朝鮮から外に出るということは，禁止されていた時代なので，密航して日本へ来たのです。

この僧侶に親しい友人がおりまして，その友人は医官で，劉大致という人でしたが，この人はまた仏教に関心を持っていたのです。またこの劉大致の友人に，清国語の通訳官がおりまして，この通訳（呉慶錫）が，清国へ使節団の通訳として行って来て，清国から新しい考え方の中国の本やヨーロッパ文献の中国訳を持って来て，友人の劉大致に預けたのです。この劉のところへ，若い貴族層の優秀な青年たちが集まって，新しい中国の本を盛んに読んでいたり，共通の関心の仏教について語り合っていたのです。

この通訳であった人物が，当時の朝鮮から見れば，禁断の本とも言えるような，新しい思想を伝える本を持って来られたのは，その使節団の団長（朴桂寿）が，朝鮮政府の高官であって，この人がまた開明派の人であったからです。しかし開明派であったために，当時の朝鮮の政治世界では容れられなくて，しばらくして野に退いて，自分の家に若い人を集めて本を読み教えていたのですが，とくに自分の祖父の思想を彼らに教えたのです。彼の祖父は朴趾源といって，18世紀の朝鮮儒学者のなかで，なかなかすぐれた学者でした。当時の儒教の主流は，正徳つまり，徳を正すということが大切だと言ってそれを第一原則としていた。それに対して朴趾源は，そういうことよりも，利用厚生が大切だとして，人間の生活にかかわるいろいろな諸事象を把握して，それを生活に役立たせ，生

活を安定させて，その上でこそ初めて人間の徳の正しいという方向が出て来るんだ，ということを言っていた人（北学派）だったのです。そうした考えは実学派と言われていたのですが，その実学派の人のお孫さんが朴桂寿で政府の高官であったが野に退いて，先に言いましたように若い人たちを集めて教えていたのです。

その若い人たちの中には，前国王の娘婿とか，あるいは当時，朝鮮は中国と同じように，政府のお役人になるには，科挙の試験制度，今の日本でいえば国家公務員試験ですが，試験を受けなくちゃいけない。その科挙の試験のトップで合格した優秀な人物（金玉均）たちが，集まっていたのです。その若い人たち，これらの上流社会のすぐれた二世の人たちや彼らと親交のあった医官の劉大致の話から，先の東本願寺を訪れ，そして日本へ本願寺の僧と一緒にやって来た僧侶の李東仁は，お前日本へ行って日本を見て来いと，そういうふうに言われて日本へ密航して来たのです。この僧侶は，いったん京都の東本願寺に足をとめ，それから東京へ出まして，浅草の東本願寺の別院に滞在している時に，そこへ出入りするお坊さんで，福沢諭吉の門弟であった寺田福寿の紹介で明治十三年の秋ごろ福沢のところに行き出入りをするようになった。これがそもそも福沢と朝鮮とのつながりと，始まりということになるわけです。

この最初に福沢と接した朝鮮人である李東仁がまた朝鮮に戻るときに日本の本をもち帰って，若い人たちによませていたのですが福沢の本も，その中には当然あったろうと思います。福沢のことはこうして彼らの仲間に知れたんだろうと思いますけれども，明治十四年に朝鮮から大規模な視察団（紳士遊覧団）が日本にやって来まして，三ヶ月近くいろんな分野について調査をしていった。その中で団長格の，いわば首脳部と言ってもいい三人の人が福沢家を訪れている。この三人のうち二人は後に大臣になった人たちなのですが，そのうちの一人が，自分のグループの随員として連れて来た四人のうちの三人を，日本に留学生として残して行った。そのうちの二人（兪吉濬，柳定秀）が福沢のもとに残されたんですね。福沢は彼らを自分の家に泊めて，そして勉強をさせることになるのです。

続いて明治十五年の八月に，先ほど言いました科挙の試験をトップで合格した金玉均が，やはり京都へ来たのを，先ほどの福沢諭吉の門弟で，お坊さんの寺田福寿が，京都へ迎えに行って，そして福沢諭吉のところへ連れて来た。これが十五年三月六日なんです。この三月六日に福沢諭吉の家に金玉均が来て，滞在する。そうすると三月十一日に，時事新報に『朝鮮との交際法』という社説が載る。これが福沢諭吉が，朝鮮のことについて猛烈に時事新報で論説を書くというスタートになる。これは明らかに，前年ないしはその年に，何人かの朝鮮の人たちと交わったこと，その交わった人たちは先ほど言いましたように，朝鮮の実学派の系譜を引く人たち。そしてその実学派をさらに，朝鮮の近代開化のために，役立たせようと志した人物たちであったのです。ですからそこで意気投合することになります。そして福沢諭吉が金玉均と知り合うちょっと前に，二名の留学生を預かった時に，これは有名な話ですけれど，小泉信三元塾長のお父さんの，小泉信吉がイギリスに留

学しているところに手紙をやって，今，朝鮮から若い人が自分のとこへ来ているが，話を聞いてみるとちょうど二十年前の自分たちと同じ状況に，朝鮮はあるようだといい，優しく面倒みてるという手紙を出しているんですね。そういうことでだんだん朝鮮に関心を持ってきていたところに開化派の志士の金玉均が来た。それで，よりいっそう関心をそそられたと言っていいと思うのです。

III

そこで始めの頃に言いました福沢の原理，思想を抜きにして，断片的に福沢の言動を処理することは出来ないという意味で，われわれは福沢といえば何といっても，彼は<文明の哲学>を持っていましたから，この文明の大主義が，この朝鮮との問題によって，どういうように作用していたかをまず見なくてはならない。その点では，朝鮮に対する関心が，東アジアに向った初めから終りまで，一貫して福沢はこの文明の大主義を前面に押し出しています。とくに朝鮮に関しては，初めから終りまでそうだったのです。その出発点である「朝鮮との交際法」を書いた時には，アジアの諸国は共同して，西洋の侵略に対抗しなければならない。そのための手段は，西洋の近代文明を取り入れなくちゃならない。その点で中国——当時の清国，朝鮮に先駆けて，文明を取り入れた日本が，先頭に立ってこの東アジアの国に，文明化を進めなくてはならない，ということを明治十五年の三月に，最初のこの論説で書いています。それから，五・六ヶ月経って，また同じことを時事新報の社説で書いています。

そしてさらに，明治十七年になりますと，これはあとで述べますけれど，先ほど言いました，金玉均たちのグループが，クーデター（申甲政変）を起こしたのですが，そのクーデターの翌年に，福沢は，朝鮮は早く儒教主義を脱皮しないと，またこういうような騒ぎが二度，三度あるだろうといい，早く文明化をしなくてはならないこと，文明化というのはこれは世界の必然だから，今，東洋で国が国として成り立つのは，文明以外にあり得ないということを，明治十八年に論じているのです。その時に，そのクーデターのあとに書かれたのが『脱亜論』なんですけれども，その『脱亜論』執筆後，ほぼ10年経った段階で，日清戦争に近づいていく頃ですけれども，その時に彼は，朝鮮と日本とは利害が同一で，その点で文明開化に朝鮮を導くことは，東洋の先進国として日本の責任だということを言う。そうすると明治十五年に言っていたことと全く同じことを，明治27年に彼は言っているんですね。

さらに，当時明治二十七年頃，朝鮮ではいわゆる東学党の乱といって，農民戦争が発生した。そこで朝鮮社会内部でも近代的な改革をしなくてはならないという動きがあった。それと同時に日本側も改革要求をつきつけた。朝鮮の政治機構を改めないと，いろんな問題が出てくるであろう。たとえば当時の清国は，朝鮮は自分の属国だとみなしていたし，朝鮮政府は自力で東学党の乱を解決

できなければ，清国に頼ることになり，そこに清国が出兵し前面に出てくるから，そうした清国の進出を押える必要があるので，そういう乱をなくすためにも，近代化を朝鮮政府はしなくてはならない。そういうことで日本政府は，朝鮮政府に対して近代化の要求を，突きつけているのです。

そういう内部的要件，外部的な要件がありまして，朝鮮政府も近代化を進めることになる。これを，その年が「甲午の年」ということで，「甲午の改革」といいますけれども，その時に福沢諭吉は，この改革は「純然たる文明主義」であって，日本の朝鮮に対する目的は，朝鮮国を自由にして，そして文明開化させるためである。日本政府の要求した改革案は，あの明治十七年のクーデターを起こした時の金玉均たちが考えていた改革と同じものだと，そう言っているのです。

さらに，その二十七年に，日本兵が朝鮮の王宮を取り囲んで，それまでの朝鮮を支配していた保守派の王妃一族の勢力を，王室から切断する事件がありました。当時の朝鮮は政府はあったのですけれど，王室と政府とが混合していて，はっきり分かれていないんです。国王がすべての中央集権の権限を持っている建前にはなっていた。しかし実際はその当時の王妃がなかなかの女傑で，王妃がすべての采配を振るっていた。国王に会いに行くと，すだれのかかった後ろに王妃がいて，こういうふうに言いなさい，こういうふうに答えなさいと言って，リモートコントロールしてたというわけです。こういった王妃一族が政権の主要なメンバーになると，これを勢道政治と言うんですけど，王妃一族が政権を壟断してたのです。彼らがどうしても清国と結びついていると日本の要求は通らない，そこでそれを絶ち切るために日本軍が出動した事件であったのですけれど，その時に福沢諭吉は，要するに王宮に日本兵が出動したのは，これはいろんな衝突騒動を防ぐためである。日本の目的は，文明開化の恩恵に日本も朝鮮も浴して，そして自分も利益し，他人も利益する，そういうことのためだと言ってるわけで，それからさらに，その年の十一月頃になりますと，日本に亡命していた朝鮮人たちについて，ほとんどが福沢諭吉を頼って亡命していたのですが，先ほど言いました明治十七年のクーデターにかかわった人が多かったのですが，福沢はこの人たちは朝鮮の文明開化のために身を犠牲にして，国に奉じた人たちだと言い，この人たちが政権の座から除外され疎外されているのを批判して，世界の大勢は文明化に進んでいるのだから，その文明化を喜ばないというのは野蛮な証拠だ，と言っている。そして翌年には，腐敗の元素（清国のこと）が，他の腐敗物（朝鮮のこと）に腐敗を加えて，朝鮮は中毒症状を起こしている。今や文明なくしては独立はあり得ない。日本の朝鮮に対する目的は，ただただ文明の恩恵を浴させるためだ，ということをくり返し論じているのです。

その二十八年の七月頃になりますと，少し論調が変わってきて，日本は朝鮮国の独立が目的だから，朝鮮の政治に介入することが出来ない。だから王室や政府の根本改革が出来ない以上，改めてむしろ，教育を通じて一般国民の目を開かして，文明化をするべきだという主張になる。政治の改革，文明化というのが，だんだん希望を失なってくるんですね。そして明治三十一年になって，改

めてふり返ってみて，朝鮮政策は失敗であったと自認するようになる。失敗というのは，これは文明主義に熱中したためで，維新の日本と同じように考えて，政治変革をすれば，国民の人心が一新化する，一遍に改まると，そう思ってしまったことだと，そのように言っているのです。

ところがこの明治31年の秋に，清国にも日清戦争で負けて，これではだめだということで，やはり近代化をしなくてはならないという動き（変法運動）が出て来るんです。それを見ると，これからは日本も清国も，互いに文明のことを共にして，直接兄弟にならなくてはならない，出来るだけ親切にして軽蔑するな，日本が日清戦争に勝利をしたのは，相手の用意のない隙に乗じて勝ったようなもので，怪我の功名にすぎない。清国は日本にとっては，幾千年来の恩師だ，この旧恩の国を，今われわれは全力で助けて，その恩に報いるべきであると，そう言ってるのです。こうみると明治十五年に，最初に言ったことと同じことをここで言っているのです。そういう論説を見ると，果たしてこれが，脱亜入欧の姿であろうか。この点，当然，疑問を持たざるを得ないのです。

IV

このように彼の文明の大原則は，一貫していた。そこで次の問題はその文明の哲学をどういうふうに具体化するかということになります。彼は明治十六年でしたか，自分の門弟たちを朝鮮の近代化のために派遣した。その時に注意を与えている。保守的な国民に対しては，改革をする時に，「理に走って人情を忘れるな」という注意をしているのです。ところが福沢諭吉の朝鮮の文明化の議論を見ていますと，自分が注意をしたことを福沢諭吉自身が忘れてしまって，もう熱中してしまう。それで日本政府のやってることも，自分の主張も同じように考えてしまうのです。自分のやっていることは，まさに日本政府のやろうとすることであり，日本政府のやろうとすることは，また自分のやろうとしてること，というように，混同している側面があるのです。そういう点で確かに一つ一つの議論をみれば帝国主義的云々と言われるような側面，なきにしもあらずですけれども，主観的には少なくとも彼は，今，言ったような文明の大主義に結び付けて言っているのです。

そこで文明を具体化する方法として，彼のやろうとしていることは，これはもう当然なんですけれども，あの明治15年に，朝鮮で政変がありました。それは軍隊に一年近くにわたって給与がとまっていた，その不満から兵隊が乱（壬午軍乱）を起こしている。その時，それまで野にいた当時の国王の父親（大院君）が担ぎ出された。その父親というのは，自分の息子が国王になった時に，まだ子供であったから，自分が代わりに政治をとっていて，これがなかなか頑固者で，開国を断乎として拒否していた人物なのです。これは先ほど言いました息子の妃（閔妃）がなかなか傑物で，一族をどんどん政府の中に入れてきて，この一派がその父親をどうも頑固者だ，具合悪いということで，明治六年か七年頃，息子の国王も成人に達したということで，いったん政治の舞台から父親（大院君）

を引きずり降ろしていた。それが明治十五年の政変で担ぎ出されて，政権の座に現われて来ることになるのです。しかしこの人はまた直ぐ，清国の方でその人が出て来ると混乱騒ぎになるからというので，直ぐ清国（清国は朝鮮を属国とみなしていた）に連れ去り，三年間ぐらい閉じ込められるのですが，この政変の時に日本人が数名殺されている。その時の賠償金支払の条約（済物浦条約）が結ばれるのですが，福沢はこの賠償金を返して，港，それから灯台，郵便，鉄道，学校等，それを造らせてやればいいと，主張しているのです。

それから明治十六年には，さらに朝鮮を文明化するにはどうしたらいいか，いくつかの方法を検討している。一つは武力を用いてやる方法ですが，しかし武力でやるのは，即効があるようで，かえってこれは危険で混乱を生ずるのでよくない。それから宗教があるが，宗教でというと日本で考えるのは仏教ですけれども，仏教はさっき言いましたように朝鮮では，もっとも差別されているのですから，その仏教では役に立たない。それから学問による方法があるが，学問は朝鮮では儒教の思想がたいへん根強くて，近代的な学問を導入しようとしても効力が遅い。一番いいのは，資金を移して工業を開発させて，そしてその経済発展の実物教育をすることを通じて，文明化の良さを教えてやることである。つまり文明の実物を見せることが，文明の門に入らせる道だと主張している。これをまさにやったのが維新の日本であって，蒸気，汽車，郵便，電信を日本は取り入れて，そして国民に文明の方向性を与えた。そういう点で経済発展をさせることから始めて，そして最後には第三番目の学問を導入することで終りにすることが一番いいと言っているのです。

その場合に，そういう交通，生産，鉱山，あるいは新聞，教育という文明の事業をする上において，資金もなく人間も朝鮮にはいないから，日本からその援助をしてやったらいいといっています。こういう文明化論は彼の『民情一新論』（明治12年）という論文で書いていることを，そのままそこに展開していると言っていいと思うのです。

こういうように彼は，文明の具体的な姿を通じて，朝鮮の近代化を考えていたんです。その点について，さきほど言いましたような明治二十七年に，新しい改革を朝鮮政府が自らやろうとするような機運を迎えた時に，彼は朝鮮には人口も多いし，物産もあり，土地も豊かだ，ただただ政治の仕組みが悪くて，貴族が専ら私欲に走って，そのために人民が苦しんでいたんだ，だから文明の事業の達成ができれば，国も富み，人民も安んじて，東洋の豊かな国に朝鮮はなることができると主張し，この文明の事業の達成を助けるのは，隣人としての日本の義務であり，そして，文明の事業は，鉄道，郵便，電信，教育等々の整備であるが，それについては日本は，費用と人間を出してやれと言っています。これは明治十七・八年に言っていたのと全く同じ内容の発言です。

しかし，先ほども言いましたように，なかなか政治の改革ができないことに，だんだんあきらめがきまして，今度は国民に目を向けて，教育，新聞，演説を盛んにするということを考えるべきだと言い出します。この教育，新聞，演説というのは，彼の持論の広い意味の学問活動だということ

になります。それを朝鮮の民衆にもするべきだと言うのです。そして優れた少年たちを日本に留学させるべきだ，今，日本に百名ばかり留学生がいる。日本に百名というのは当時，慶応義塾に百名ばかり来ていたんですね，この百名では足らないから千名にすべきだ，一人当たり二百円かけたとしても，二十万円あればできる，大したことじゃないと言っているのです。確かに二十八年の五月に，留学生が百名朝鮮から来て，その時には新橋の駅に，幼稚舎生を先頭に，幼稚舎から大学までの慶応義塾塾生が，数百名，新橋の駅まで迎えに行って，朝鮮国旗と慶応の旗を先頭にして，新橋の駅から三田の山まで行進し，三田の山にくると福沢諭吉が迎えに出ていたということになるわけです。このように留学生が，慶応義塾には，明治時代には二百名ばかり来ているんです。この二百名という留学生は，福沢研究センターで調べますと，福沢諭吉が生きていた時代において，入学生を都道府県出身別にすると，中間ぐらいの順位になり，かなりの数だと言っていいのです。

そうしたことで慶応義塾へ留学した中で，優れた人が出ておりまして，朝鮮の先ほど言いました明治二十七・八年の改革の中における一つが，教育にあったのですけれども，その改革における教育思想の原理になったのは，福沢諭吉のところに来ていた人たち（兪吉濬，朴泳孝）の思想である，と言われています（姜在彦氏）。それから昨年，韓国の学者（李基俊氏）が，韓国における経済学の導入の本（韓末西欧経済学導入史の研究）を書かれているのですが，それを見ますと巻末に，朝鮮の経済学者，つまり明治以降の経済学者の名前が並べられてあります。そこにかなりの数の学者が慶応義塾出身者として記されています。そうしたリストのなかから，とりわけ三人だけ，その本の著者が選んで，詳しくその思想を述べている。その三人のうちの二人（兪承兼，金大熙）までは，慶応義塾で学んでいます。それから今日，朝鮮においては，たとえば日本ですと平仮名，片仮名と漢字混じりの文章になっておりますように，あのハングル文字と漢字とが一緒になってます。そのハングル文字と漢字とを使って，一般大衆にも新聞，雑誌が読めるように，近づけるようにしたらいいじゃないかというヒントを，アイディアを与えたのは福沢諭吉なのです。福沢諭吉は自らハングルの活字を，数十万個作らして持っていた。そして自分の門弟（井上角五郎）を朝鮮に派遣する時に，そういうアイディアを授けてやる。その門弟が自分の朝鮮語の勉強のために教えてもらった朝鮮の学者と協力して，ハングル文字を漢字と結び付けることを具体化した。その時にその活字を福沢諭吉から譲り受けて，使用しているわけです。

V

こういうようなところを見ましても，これが果して，脱亜入欧の姿なのでしょうか。この点をより一層はっきりさせることがあります。それは今，言いました文明の哲学を実践するプログラムに関わることです。それは朝鮮の改革の具体的な問題として，どのように考えられたか，そして彼が

それにかかわり合った姿勢の動揺のうちにみられることです。彼の朝鮮の改革についての態度をみますと，こうした方がいいという提案をし，この提案の目的はこうだと説明しています。そして改革はなかなか難しいと言いながら，焦り，怒り，いらだち，絶望し，しかし朝鮮に対する気持ちはなかなか捨てきれないでいるのが，非常によくわかるのです。

その点を簡単に申し上げますと，先ほど言いました，明治二十七年頃，改革の機運が出てきた時に，福沢は直ぐ，朝鮮は外交，それから警察，税制，貨幣制度の改革，銀行の設立の必要を説き，そして宗教，教育，衛生，運輸，交通等々，朝鮮社会全般にわたって改革をしなければならないという論説を，時事新報に載せる。しかし彼はまた，朝鮮では先ほど言いましたような，王妃の一族が政治を壟断しているからなかなか難しい，人材が十分にいないことを，またくり返し言ってるわけです。そう言いながらも，この改革の目的は，あくまで文明化なのだと言っているのです。ところが，朝鮮政府は明治二十七年七月，日本政府が要求したところの改革案を否定しないが，現状では実行不可能と実質には拒否してきたのです。そうしますと福沢諭吉は，これは清国がその王妃一族をけしかけて，扇動して日本の改革案を拒否させたのだと言い，こうなった以上は直ちに清国に対して，戦争を開けと強硬な発言をする。それが効いたのかどうか，翌日，清国海軍と日本海軍が，豊島沖で戦闘を交えて，日清戦争が始まるということになるのです。ところがすでにふれましたが，その7月下旬，日本軍が王宮を取り巻いて，王妃一族を排除するということがあると，直ぐ，その王妃一族に対して，処分は寛大にすべきであって，改革は暴力によっては出来ないことを言っているのです。

さらにそのあと続けて，日本はあくまで朝鮮人民の自由と，生命と財産の安全，つまり福沢諭吉の持論からすれば<人権>ということですけれども，多数の人を幸福にするために，その人権を確立することが目的で，そこに一点の私心もないので，その朝鮮人民の人権を守るということは隣国の義務なのだから，そこから発した改革の要求なのだということを，くり返しくり返しまた言っているのです。ただ，そこでひと味違ってきたのは，朝鮮の，今まで政権を壟断してきたところの王妃一族が排除されたから，やがて朝鮮も追々文明化の方向に向うであろう。そしてその文明化の方向に向った時に，その文明の先生をヨーロッパにとろうと，あるいは日本にとろうと，それは朝鮮人民の自由であるという論説を書いているわけです。ここには明らかに，何が何でも日本と朝鮮でなければというそれまでの気持の推移がみてとれます。

だがまたそう言ったと思うと，直ぐさままた改革に向って再編された，新たな朝鮮の政府が，かつて日本に亡命して，ようやく帰ることを許されたあのクーデターのグループ層というものを，重く見ておらない，用いていない，この人たちは朝鮮の文明のために，身を犠牲にして国のために働いた人たちじゃないか，その人たちを使わないというのは何事かといって，批判するのです。そして朝鮮政府が彼が思ったように文明化を進めないことにいらだって，彼は次のようなことを言い出

すのです。もはやこれからは慈母の手から，情け深い母親の手から，厳しい父親の手に，厳父の手に渡すことが必要だといって，政治の実権は日本人が握って，そして朝鮮人に訓練することと，それから再建のための，改革のための資金は貸して，しかし会計の全権は日本人が握って，それで整理した上で貸せと，こういうことを言い出すのです。

このように，極めて過激な，強硬なことを口走ったかと思うと，また直ぐそのあと，朝鮮政府が500万円の公債を，日本において募集しようとした時に，朝鮮は政治がよくなれば，人民には当然それなりの経済的な負担力があるから心配はない，日本政府は金を貸してやれ，そしてその金を貸しても，それを恩恵とするな，その金が使われて，経済発展して，将来日本の貿易相手として発展すれば，それでいいじゃないかと，言っているのです。

それから改革途上において，明治二十七・八年から二十九年頃にかけて，何度か朝鮮政府に政変があるのですけれども，その政変がある度に，やはり改革派は排除されてしまう。そこでやっと帰って行った朝鮮人の亡命者たちが，また日本へ再び亡命して来る。それがみんな福沢諭吉のところへ頼って来ることになる。その時に，今度は怒らないで，たいへん冷静に，朝鮮というのは野蛮な国ではなく，昔から教養がある国だ，人民には文の能力がある，上流の人たちには，緻密な思想や分別力もある，ただ，支那の儒教の毒素に中毒されているだけだと言って，文明の素質はあるのだけれども，方向を間違えたんだ，だから文明の友は友として，頑固者には説得をしなさいと，こういう冷静な呼びかけをしてるのです。しかしこのような段階になると，だんだん政治の改革というのは難しく早急には期待ができないことが自覚されてくる。そこで国民の教育，普通教育という方向に，彼は力を入れようとしてくるわけです。

明治二十九年になりますと，福沢のもとに最初に来た留学生（兪吉濬）が朝鮮政府に入閣をすることになります。入閣をしたもんですから，まあこれで政治が安定してだんだんいいだろうと思っているうちに，日清戦争で，日本が勝って清国が負けたために，それまで清国に頼っていた王妃の一族が，今度はロシアに頼ろうとする。それを切断しようと，在朝鮮日本公館と右翼浪士たちが計画して王宮に乱入し，王妃を殺害した事件が発生すると，福沢は「大いに赤面する」といって関係者の厳罰を求めている。そして二十九年の二月頃に，ロシアの公使館に国王と皇太子が逃げ込むという事件があった。その時に馳せ参じようとした総理大臣，それから商工大臣が，その途中で群衆に殺され，さらに入閣していた福沢のもとで学んだ最初の留学生の兪吉濬は，またも日本へ亡命するという事件が起きるのです。そうしますと福沢諭吉は各国共同して，朝鮮の改革をしたらどうか，朝鮮人がバラバラに，めいめいがそれぞれの外国に結び付きを求めると，それでは朝鮮は分解する以外の何物でもないから，そこでいろいろな改革について，各国使節団の共同会議を開いてやったらどうだろうかという提案をするわけです。この提案は，清国にかわって朝鮮の前面にあらわれた当時の強大なロシア帝国に対抗するために，各国共同の場を用いることでチェックしようという，

側面がなきにしもあらずなんですけれども，しかしむしろこれはこれから述べますように，朝鮮の政治改革への絶望感から出ていたと言っていいと思うのです。

国王が1年後ロシヤ公館から王宮に戻って来て，他方，日本とロシアの間に，朝鮮の改革には共同してやろうという協定（小村・ウェーベル協定）が結ばれるのです。その協定のあと，明治三十一年になりますけれども，彼は，先ほどもちょっと言いましたように，対朝鮮政策，その改革の失敗を顧みて，さっき言った文明の主義に熱中したために，だめだったということを言い出す。それから，それまた同時に，朝鮮に対する肩入れは，義侠心から出たことだ。つまり弱きを助け強きをくじくという，義侠から出たんだと。ですから義侠心というのは，対個人対個人の間では通ずるけれども，国家対国家の間には通じない。国家対国家の間は，よく政治学で言います，国家理性つまり国家の権力というものを中心にして，お互いに動くわけです。その点は今日の世界状勢をみれば明白でしょう。ともかく国家間は別のもので動くのに，それを義侠心という形でやってしまったのが失敗だったと反省する。そして先に言いました文明主義に熱中してしまったことに関して，古い習慣というものは，一朝にしては改まらないものであるから文明の直輸入主義を，相手に押し付けるというのは禁物だという反省をする。こうした反省からというよりも，絶望からと言っていいと思うのですけれども，内政改革，独立を助けるというような，政治改革への情熱は，一切断念した方がいいと言い出す。改革は実物教育で，自ら朝鮮の人民に悟らしめた方がいい，だから政治上で，ロシア人やイギリス人が来ようと，政府がどうあろうと，一切関知せず，むしろ多くの日本人がどんどん朝鮮に移住して，殖産工業，資源の開発，知識の開発に努めて，そして人民どうしの接触を拡大して，天から与えられた利益を，お互いに共にした方がいいと言う。そして移住した日本人が私権を守り，私権というのは福沢の場合，生命，財産の安全と，人間としての面目，名誉ということですけれども，（つまり人権）私権を守って，しかもまた，法を守り，税金を納めて，それ以外には断乎，拒否する。つまり朝鮮の官吏が圧力をかけて，自分の懐を肥やそうとしても，そういうものを相手にするなということなんですね。そういうふうにして，一人一人の生活に得るところが大きいということを，朝鮮人民が現に見れば，朝鮮人民は発奮して，知らず知らずのうちに自ら改革に立ち上がり，資源開発に向うだろうと言いまして，半島での区々たる権力の消長を見て，一喜一憂するのはナンセンスであると言って，政治の改革から手を引くべきだということを言い出すのです。このように朝鮮半島に国際政治がどう及ぼうと，それは一喜一憂するのはナンセンスだ，もうそういうことはどうでもいいと言い出すのです。

ところがそれを言ったその時点では，そんなのんきなことは言っていられなかった。といいますのは，ドイツがその年，三十一年になりますけど，三月，その朝鮮半島と隔った中国側のあの山東半島一帯，あの膠州湾を租借してる。それからロシアが，旅順，大連の金州半島を租借した。イギリスもまたその朝鮮半島の対岸の清国の海軍基地であった威海衛を租借している。まさにヨーロッ

パ列強が，着々と東アジアの征服のための基地づくりを強力に押し進めていた時期なんですね。だからそういう時期を彼は知らないわけはない。ちょうどその時期はフィリピンが，アメリカ軍がスペインを追っ払って占領した時期なのですが，それに対して福沢は，アメリカだからよかった，アメリカは他国に対する侵略なんていう気持ちはないから，アメリカでよかった，てなことを言っているぐらいですから。国際政治の行方を無視してたわけじゃない，知っていた，知ってたにもかかわらず，イギリス人が朝鮮半島に来ようが，ロシア人が来ようが，そんなこと我，関せず，そんなことにいちいち心配するのはナンセンスだと言った裏側には，彼の深い絶望の思いがあったに違いない，と思います。

こういうように，政治改革に対する絶望感があって，彼のそれまでの政治改革に対する思い入れは断ち切られましたけれども，しかし残ったところは，やはり朝鮮人，朝鮮に対する愛情なのです。そこでさっき言いましたように，日本人がどんどん行って，きちんとした生活を見せて，そして知らず知らずの感化を及ぼせばいい，ただ，今までの行きがかり上，日本人に対する不安や疑念を持ってるから，不安や疑念をなくすためには，ちょうど日本に来ていた，亡命朝鮮人に帰ってもらって，彼らにその仲立ちをする役割をしてもらえばいい。亡命を受け入れたというのは，これは文明国の慣習だということも理解してもらい，そしてその辺の下地を整えてから，帰ってもらえばいいじゃないか。それからまた，移住した日本人が，自分の利益だけをもって行動すれば，これはどうしても粗暴な行いが出て来る，不都合が生ずるだろうから，それについてはお坊さんに移住してもらって，そういう日本人の感化をしてもらったらいい。東西本願寺よ頑張ってくれと，そういうようなことを言っているわけです。

以上のように文明の哲学，文明を進めるところのプロセス，具体的な提案の問題を，さまざまな感情の起伏のもとで，しかも一貫した朝鮮への心情，開化派への同志的な気持から，のべているわけです。

VI

もう時間がありませんので，いよいよ『脱亜論』そのものについて触れたいのですけれども，近代朝鮮を考える時にいくつかの重要な事件がありまして，それぞれのポイントについて，福沢諭吉がどういうように対応していたか，細かく言いたいのですが，時間がありませんので，「脱亜論」の問題にかぎって，今日は申し上げさせていただきます。明治十七年の十二月十四日にクーデター（甲申政変）があった。そのクーデターを起こした人物は，福沢諭吉のところに来ていた人と，並びに慶応義塾へ留学していた人のグループが大半なのです。このクーデターは三日にしてつぶされてしまう。そのクーデターを起こしたそのグループは，朝鮮のさっき言いました科挙の試験のトッ

プで合格した人，あるいは前国王のお婿さんだとか，あるいはその当時のトップクラスの政府高官の息子とか，そういう貴族層の子弟が主であった。けれども，その人たちが清国からの脱却，それから国民については平等，能力本位の人物起用と，それから軍備並びに税制の近代化，国王の専権をチェックするというような，近代化の旗印を掲げて立ち上がったわけです。今日，朝鮮民主主義人民共和国では，このクーデターは，民主主義革命であったといって，大変高く評価をしています。その点はいろいろ評価の上で問題はありますけど，これについては今日は省かせていただきます。この「甲申政変」と言われるこのクーデターが十七年の暮れに発生し，その報を聞いた時に彼は，これは朝鮮の内部において，清国に頼ろうとする勢力が強くて，独立改革派は少数だが，この独立の少数派が重臣を排除してやろうとしたに違いない，しかし支那兵にやられて，日本の公使たちは引き揚げるということになったんだろう。結局，国王もまた，クーデター派から離れて，その保守派の手に行ったに違いない。そして独立派は追っ払われて，日本人が攻撃されることはあるだろう，心配だということを，割合と冷静に言っているのです。当時，清国軍は1,500名ほどソウルにおったんですが，それがクーデター三日後に，クーデター派を攻撃してつぶしたわけで，その点で彼は早くから，この問題の奥には清国軍ありと，清国が問題の対象だということを言っているのです。

そうしているうちに事件の直接の目撃者たちが帰ってき始め，その中に彼が派遣した門人（井上角五郎）もいた。そして彼らが福沢諭吉に話をすることになる。こうして福沢は次のように言う。事件があったのは十二月の十四日だが，二十三日頃門人が帰って来たので，事情がわかった。日本人の被害は想像より大きい。このクーデターつぶしの事件を首謀し，けしかけ，実行したのは皆，支那人である。だからこの支那兵は直ちに引き揚げさせろ，そして日本人を殺した償いとして，清国政府は二千万円出せと，それでいっさい終りにしろといっているのです。それが十二月の二十三日ですが，続いて二十四日の新聞の論説には，「支那兵の残虐さ」ということが書いてあって，支那兵は日本人の，官であろうと，民間であろうと，男であろうと，女であろうと，それから老幼であろうと，無差別に日本人を殺している。今このことを原稿用紙に書きながら，自分は涙を抑えきれないと，だんだん興奮してきているのです。それが二十四日の事。二十七日になりますと，さらに興奮して，今こそ立たなくちゃならない，支那が相手だ，支那は大国だけれども，しかし我に四十万の士族層があると，彼の嫌いだったその士族をもち出すわけですが，もう，一身はいとしむに足らず，北京に討死すべし，財産をいとしむに足らず，一切あげて軍の費用にあげなくてはいけない。この国に生きる唯一の望みは，日本の独立を見るのみ，というようにいよいよ興奮してくる。その一方では朝鮮政府との交渉は，一切もう終った。日本政府と朝鮮政府の間では賠償金を出すということで片が付いた。もう十分だ。しかしまだ支那との間は残ってる。もともと支那兵が王宮を警備していた日本兵を攻撃したのが始まりなのだから支那の問題が一番の根源にあって，まだ解決してないといって支那に対し感情をたかぶらせる。

そう言ってるうちに翌，明治十八年を迎えまして，二月の二十三日になって，朝鮮からある情報が入ってきた。つまりそのクーデターを起こした人たちの処刑の情報が入ってきたのです。その処刑が，クーデターを起こした人たちの一族，家族にまで及んでいた。そのことが，福沢をいたく刺戟したのです。福沢曰く，朝鮮政府は弱いために人を殺したのだ，強い人は余り殺さないものだ。日本でも，源平の時代には敵の子供まで殺した。ところが西南戦争の時には，西郷一人にとどまって，西郷の家族には，別に処刑ということはなかったではないか。このことは文明の強さと言うべきである。ところが今，朝鮮人は，日本の源平時代のことをやってだれも怪しまない。これは数百年来，支那の儒教主義に中毒したせいで，精神の独立を失って，そしてまた近年，支那の干渉が強いために，知らず知らずに野蛮化したのだといって，ここで始めて，朝鮮人に対する批判が出て来るんです。それまでずうっと清国に対する非難だったのが，初めて朝鮮人に対する，朝鮮社会，国，政府に対する批判が出て来るのです。これを書いたのが十八年二月二十三日なのですけれど，二月二十六日になると，さらにクーデーターを起こした人の処刑を具体的にあげて，例えば4名の人は死刑にされ，その人たちの父母，兄弟，子供に至るまで絞首罪。別の2名もまた，これは謀反の罪で処刑，その家族中，男女ともすべて奴隷。それから5名の者は，その事情を知っていて告げなかったから，当人のみ処刑であったと言い，そして金玉均とか朴泳孝などの主な人たちについては，彼らの父母，妻子もろともソウルの南大門の外で絞首刑にされたと言っている。実際はちょっと違うんですけど，そういう情報として彼はもっていたのです。

そしてその点について，関係家族まですべて処刑されたが，当人の処刑は忍んでもいいけれども，婦女子や老人まで刑場に引きずって，東西のわきまえも知らないような子供の首にまで縄をかけて殺すとは，果たして如何なるものやといって，次のような非常に心情のふるえそのものの発言をする。「よしんば，大人たちは，自分たちが罪はないとしても，しかしその事情がわかって，殺されるということもあり得るだろう。しかし，三歳，五歳の小児が，父母の手を離れてさえも泣き叫ぶを常なるに，荒々しき獄吏の手にかかり，雪や霜の吹きさらしの城門外に引きずられて，細い首に縄をかけられて行った時の，その時の情は如何なるべきや。ただただ恐ろしき鬼につかまれたる心地するのみで，その縄がしまるにつれて，息絶えるまで殺されるとは露も思わず，ただ父母を慕い，兄弟を求めて，締縄がようやく狭まりきて，泣き声がようやくかすかにして，ついに絶命したることならん」と，そういうように言って，「人間娑婆の世界の地獄，朝鮮京城に出現したり，これは野蛮というよりも，妖魔悪鬼の地獄国と言うべきだ。この地獄の当事者は，その保守頑迷派の政府の役人で，その後ろにいたのは支那人だ」と言っているのです。そしてさらに，「自分は今この文章を書きながら，涙が落ちて原稿用紙が潤うのを覚えざるなり」と涙がしたたって，原稿用紙がくしゃくしゃになるのもわからない始末だと，こう言っているのです。

先に現地からひきあげた人を通じ事件の情報が入って来た時には，支那兵が日本人を見境なく殺

したといって，日本人に涙を流した。今度は朝鮮人に対して，彼は涙を流しているのですね。そして，こういう点では，自分は他国人だから，朝鮮の主権が朝鮮にある以上，どうこう言うわけではないけれども，ただ人民相互の交際という点からみると，こういうようなことが行われる限りでは，交際上においてどうも心のずれがある。文明の正道に入って，有形，無形一切のことについて，何ら驚くことない場合に初めて，われわれは一緒にものごとを論じ，考えることが出来るのだけれど，そうでない限り気の毒ながら，同族視することは出来ない。ちょうどそれは，西洋人が東洋の諸国に対して，宗教が異なるから何となく交際上にずれがあるのと同じように，自分もそういうずれを思う。朝鮮国，支那国に対して，ちょうど西洋人たちがずれを感じるのと同じように，われわれ日本人は感ずると，そういうことを言っているんですね。まさに脱亜感を吐露しているのです。それが二月二十三日。それからしばらく経って三月十四日になると，その脱亜感情が論理としてほとばしることになる。すなわち今の世界は，もはや西洋文明がとうとうとして流れているのだ。東洋でも，国が独立するためには文明を起こす以外にない。そう言って，文明を入れなければ国は亡び，文明が入れば旧政府が亡びるという，有名な福沢の文明のテーゼを述べて，日本はアジア唯一西洋近代の文明を取り入れて，旧いものを脱して，新機軸を出した。主義とするところはただ一つ，脱亜の一字あるのみである。そして朝鮮や支那は，旧いものに恋恋として，百年，千年の昔のままでいる。ただただ儒教のことだけ言って，実際の真理，原則には疎くて，道徳もなく残忍だ。こういう支那，朝鮮政府が，古風専制で，法によることもしない。支那人は卑屈で恥知らずだ，朝鮮人は残酷だ。こういう人たちと付き合っていると，日本人まで西洋人にはそういうように見られるじゃないか。だからこれからは，朝鮮，支那に接するにも，隣人なりとも特別の会釈及ばず。西洋人が接する風に従って処分すべきである。悪友に親しむ者は，共に悪名免れずと，われわれは心において，アジア東方の悪友を謝絶するものなりというように興奮はいっきょにのぼりつめるのです。これが有名な「脱亜論」なんです。

そのあと彼は，朝鮮は今のままでは独立が不安だと，支那の属国にこれでなるかもしれない。日本が手を引いたら属国になるかもしれない。しかし支那も実力がなければ，西洋の諸国にたちうちできないだろうと言って，十七年のこのクーデター以後，朝鮮では日本人をたいへん恨む者が多いだろうけど，日本人が手を引いたあとはそうなるだろう。そしてまた日本公館が引き揚げてしまえば，残った日本人はどうなるやら，それこれ考えると，はなはだ淋しく，実に残念なりと言っているんです。心が千々に乱れているのです。

彼は今までのお話からわかりますように，世間で言うような「脱亜論」を主張しているわけではありません。しかも彼は，日本と朝鮮の国交上の大原則は，彼は初めから，日韓の交際は百年，千年だと，一日のことでないという主張を掲げていたのです。それは明治十五年の八月一日の論説がそうなんです。それから明治三十一年の五月においても，また同じことを言っているのです。だか

ら初めから終りまで彼は一貫した立場を取っているといってよいと思います。ですから，また明治十八年に最初に言って，それからさらに明治二十七年から五回にわたって，日本は朝鮮を併合するというようなバカなことをするな。あるいは朝鮮を保護国とするようなバカなことをするな，くり返えし，くり返えし言っているのです。

そして，さらに彼は明治二十八年，日本が日清戦争に勝った，戦いに勝った日本人が増長している。特に朝鮮の日本人が増長してるから取り締れと言っています。つまり朝鮮を助けたのは，われわれは朝鮮の独立化のためなのだ。隣国の交際国として，深く交わるために朝鮮を助けたのだ，その目的を忘れてしまってはいけない，せっかくの努力はなくなってしまうではないか，一寸の虫にも五分の魂ということは朝鮮人だって持ってるぞと，戒めているのです。そして明治三十年には彼は六月頃ですけれども，「戦勝を後悔するものなり」と言い出します。戦いに勝って栄光に酔いしれて，自ら誇るならまだしも，外に向って威張り散らし出して，逆上している。要するに戦いに勝ったというのは，老朽腐敗物を倒しただけで，ちょうど幕末において幕府を倒したと同じようなものだ。その戦いに勝って，のぼせ上がって，前後のことを忘れている。自分は戦争に勝ったということを，戦争の初めの頃は，さっき言いましたように生命，財産ももはやいらんと，北京で討死するんだと，そんなようなことを口走って，自分も戦争の初めには少し興奮したことがなきにしもあらずだけれども，これは日本が初めて，大国との戦いということを始めたから，そうなっただけの話であって，戦争が終っては自分は一切，そういうことは誇ったことはない。そういう点で日本人がのぼせ上がっていると，このように増長した日本人を批判して彼は，「戦勝を後悔するものなり」と，そういっているのです。有名な『福翁自伝』で，戦争に勝って涙を流したと，それは確かにそうだったと思うのです。あの内村鑑三でさえも，日露戦争に反対した。ところが戦争に勝ったという報知がきた時には，ちょうど万朝報か平民新聞社かどこかの2階の編集局にて，部屋中破れんばかりの声で，「万歳！」と言ったそうです。その当時の小国日本人の気持ちというのはそうだったのでしょう。しかし，福沢は冷静になって考えてみれば，増長する日本人を見て，戦勝を後悔するものなりと言っている。小泉信三先生の岩波新書の，『福沢諭吉』は，戦いに勝って喜んで涙流して，明治維新で倒れた人たちの先輩に，見せてやりたいもんだということだけは書いてあるけれども，この片っ方の，戦勝を後悔するものなりと言ったのは全然，落している。小泉信三先生ともあろう人が，どうして落したんだろうかなと，あの本は私はそういう点では害悪を流したと思います。(笑)

それでさらに，私のいままでの主張を最後に物的に論証するものをあげておきます。『福沢諭吉全集』の最終巻と別巻を見ますと，福沢諭吉の家計簿がある。これは断片的なものですから一貫してないんですけれども，その断片的な家計簿を，一つ一つ見ていますと，朝鮮人に対してあるいは朝鮮人のためにお金を払ったというのが非常に多いのです。朝鮮人のために洋服を作ってやった，靴を買ってやった，旅費を出してやった，病院の入院費を出してやった，そういうお金がたいへん

多い。とくに明治二十九年頃から，つまり政変で亡命者がふえたころからですが，朝鮮人へというまとまったお金が毎月のように出て行くんです。とりわけ明治三十年から，毎月710円というお金が，月末必ず朝鮮人へということで支払われている。彼が脳溢血で倒れた，確か九月だと思いますけれども，十一月の月まで，明治二十九年から明治三十一年の十一月まで，今，言いましたように毎月の終り頃になるときまって710円，朝鮮人のためにというお金が支出されているのです。そういう彼が朝鮮人たちのために支払ったお金，それから彼が彼らから預ってやったお金，いろいろあるんですけれども，その差引計算を大まかにしますと，朝鮮人のために約1万5,000円ばかり金を支出している。この1万5,000円ばかりのお金が，現在のお金にしてどのぐらいになるか，私はどうもその方が弱いもんですから，その方面の専門家の方がいらっしゃったら，私に教えていただきたいんですけれども，一昨年ですか昨年か，NHKが明治三十年頃の夏目漱石が熊本にいた当時の家計簿を紹介したことがあります。その時にNHKではどういう根拠か知りませんけれども，現在の貨幣価値に比べて，現在で一万倍にしているのです。1万5,000円の一万倍，皆さん計算していただきたいと思うのです。今日の権力者たちが，得体の知れないお金をがっぽり自分の懐に入れて，それを撒き散らして自分の権力源にしている。そういうのとは違って，自分のペン一筋に生きて，ペン一本で稼ぎ出したお金を，今の計算で言えば億を超えるお金を，たった数年間の間に支払っている。しかもそれは，ほとんどが亡命の朝鮮人のために支払っている。その意味がいったいどういうことであるか，ということをお考えいただきたいと思うのです。で，ここで私の話を終らせていただくわけですけれども，こう考えてきてみますと，一番最初に言いました，いわゆる進歩的な文化人なり，左翼の人たちが，福沢諭吉の脱亜論を，帝国主義の先触れだということは，私はとても言えないんじゃないか。あの人たちの多くは，つまり『脱亜論』の僅か一・二ページだけを読んで，そういうことを言っているに違いないとしか考えられないのです。

最後に，福沢諭吉が病気で倒れて以降，そして亡くなって以降，パッタリ朝鮮と慶応義塾は断ち切れてしまっています。あの明治三十年の始めぐらいまでは，極端な言い方をすれば朝鮮から勉強に来るといえば，ほとんど慶応義塾へ来ていたと言っていい。それが断ち切れてしまっている。そのあとの慶応義塾はいったい何をしていたのか，ということを考えざるを得ない。そのあとの朝鮮人はどこへ行ったか，慶応義塾へはほとんど来なくなってしまった。まあ来てたかもしれないけど，もう目立たないのです。そして最近のことを考えてみますと，これは私自身，反省しているんですけれども，経済学部とか法学部は，第2外語に朝鮮語があるのに，商学部は第2外語に朝鮮語がない，中国語がない。残念だなあ，あとの諸君，どうかよろしくお願いします，ということで終らせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

——了——